

なぜ生乳余りが問題となっているのか①

<例年のサイクル>

- 生乳^{注1}は、例年、春先と年末年始に需給が緩和^{注2}しますが、ウシは毎日お乳を搾らないと病気になってしまうため、搾る量を増減することはできません。

注1：搾ったまま（殺菌等をする前）の乳 注2：需要より供給が多く、余りがちになること

- 春先は、ウシにとっては快適な気温で生乳生産が好調になる（図1）一方、ヒトはあまり喉が乾かないことや春休み・GWで学校給食がないため消費が少なくなり、生乳需給が緩和します（図2）。
- 年末年始は、生乳生産は多くありませんが（図1）、冬休みで学校給食がない上、お正月にはあまり家庭で牛乳が飲まれないため、消費量が極めて低水準となり（図2）、生乳需給が緩和します。

図1 生乳生産量の季節変動

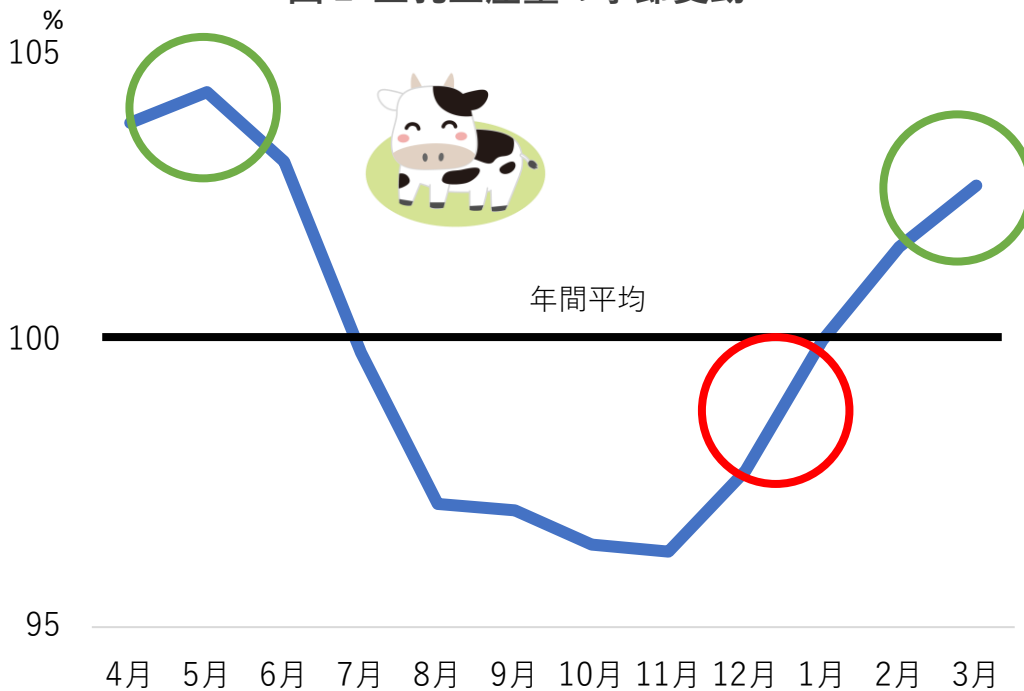
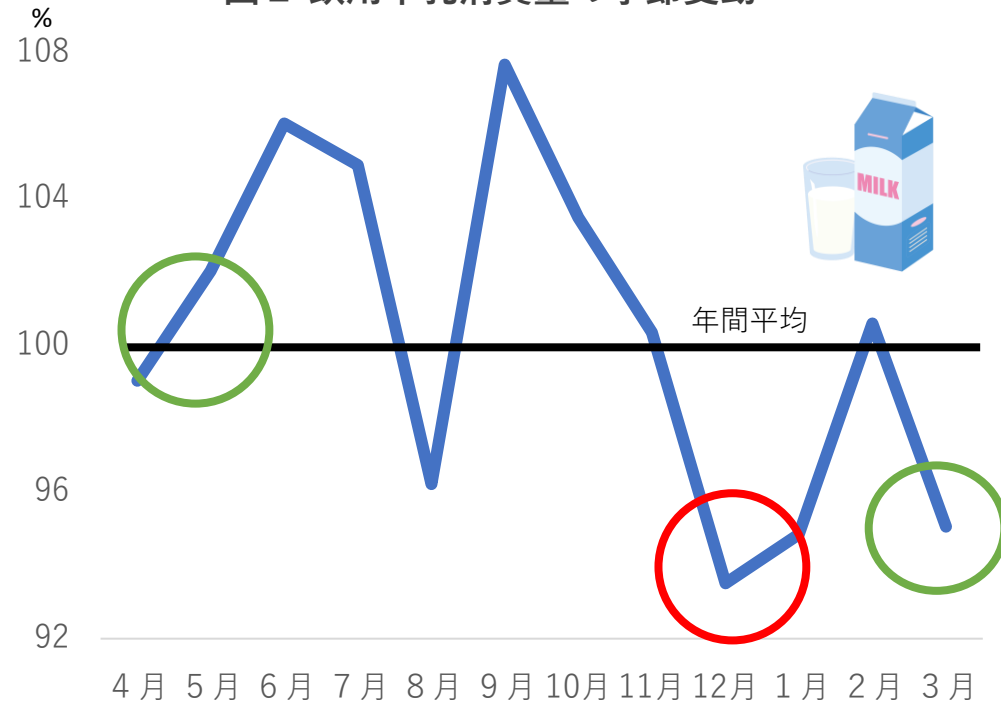


図2 飲用牛乳消費量の季節変動



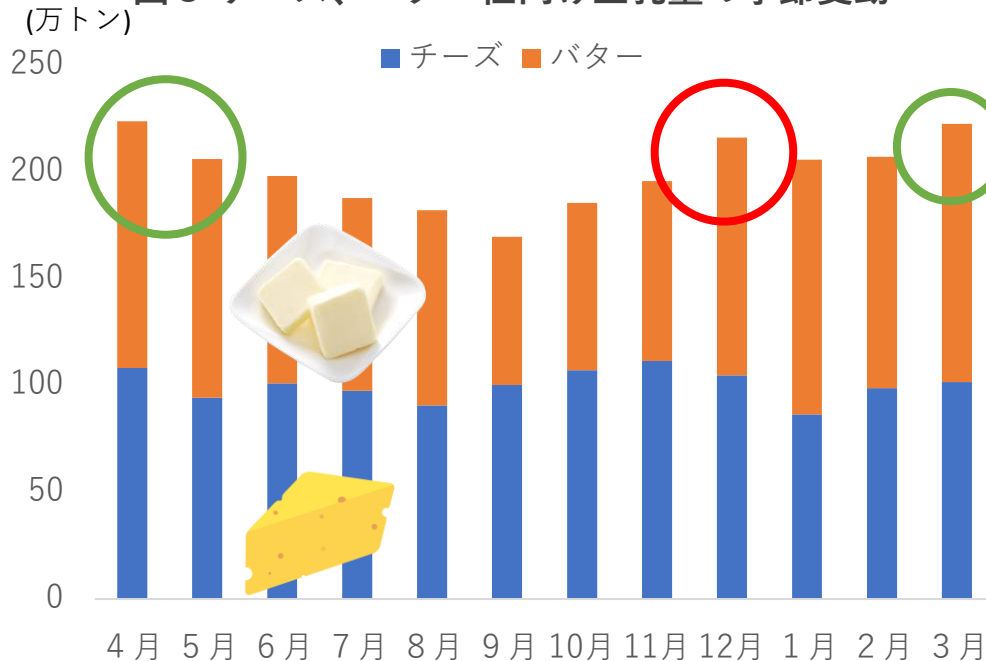
なぜ生乳余りが問題となっているのか②

- このため、乳業メーカーでは、年末年始と春先に賞味期限の長いバターやチーズを多めにつくることで、生乳を有効活用しています（図3）。

<近年の状況>

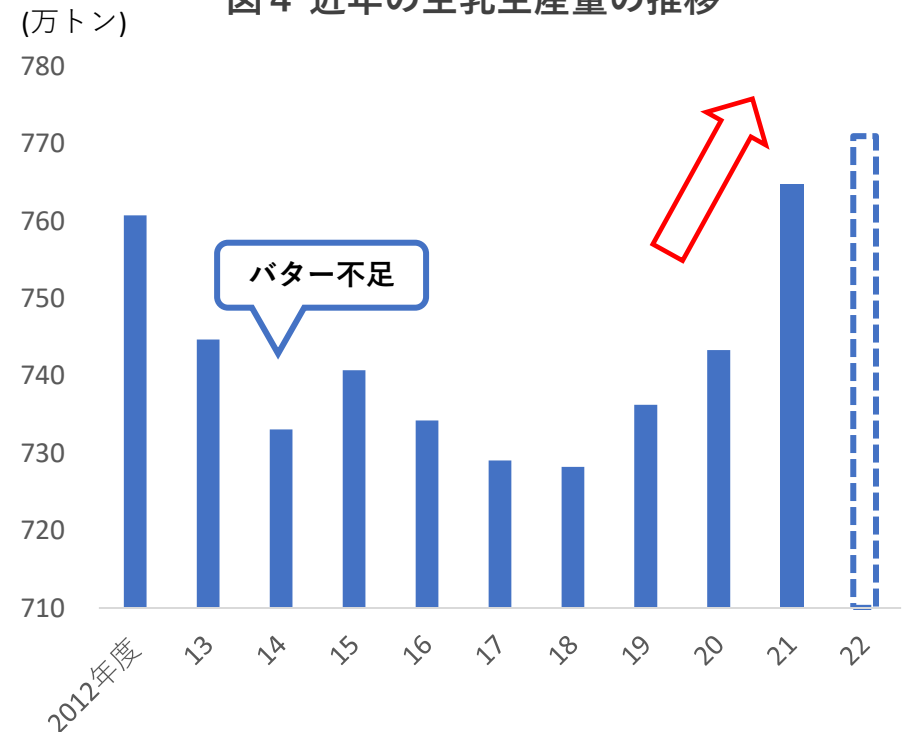
- バター不足以降取り組んできた増頭対策が功を奏し、生乳生産が大幅に増えていることや（図4）、コロナ禍による業務用需要の停滞が重なり、バター等を作る工場の受入可能量を上回って生乳が供給されるおそれ（処理不可能乳の発生）が懸念されています。

図3 チーズ、バター仕向け生乳量の季節変動



出典：牛乳乳製品統計を基に牛乳乳製品課作成
注：チーズは直接消費用を除く。

図4 近年の生乳生産量の推移



生乳需給の歴史

- 生乳需給は歴史的に緩和とひっ迫を繰り返している。
- 生産者が増頭すると決めてから生乳生産が実際に増える（種付けし、メス子牛が生まれ、お乳を出すようになる）までには約3年かかるため、その間に需要が変化して需給のミスマッチが生じやすい。

